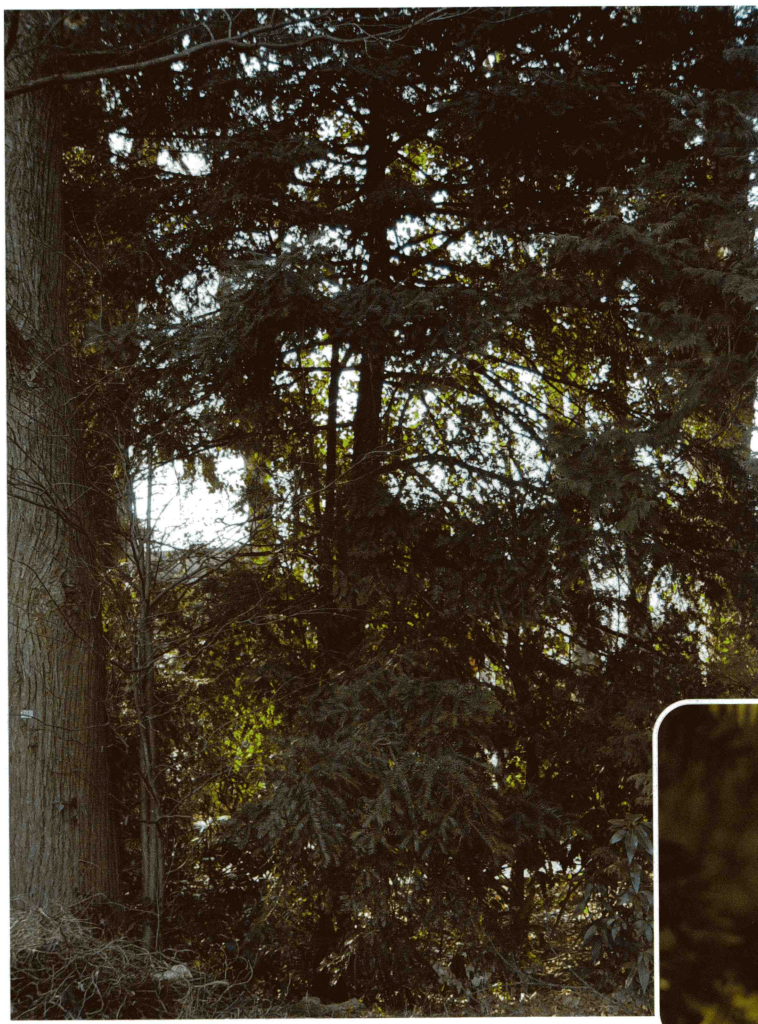
農工大の樹　その53



〈解　説〉

カ　ヤ

（イチイ科カヤ属の種、学名：*Torreya nucifera*　Sieb. et Zucc.）

この種は樹高25m、直径2mにもなる常緑針葉高木で、岩手県、山形県以南の本州、四国、九州、屋久島、韓国の済州島に分布しています。自然の生育地は高海抜の常緑広葉樹林の中で、ウラジロガシやアカガシなどと混生しています。名前の由来は、枝葉を焚いて「蚊(か)遣り(やり)」に使ったからとか、丸太材を扱うと体がかゆくなるからとか言われていますが、定説はないようです。写真に見るように、枝は対生で、先が針状で光沢のある葉が枝に２列に並んで着きます。また、秋には雌株の木に油脂を多く含む丸い種子が着きます。この種子は食用油の他、十二指腸虫の駆虫薬や漢方薬としても用いられました。済州島では、李王朝にこの種子を献上していたそうです。この材で作った碁盤は最高級品で、石を打つとくぼんで石の座りがよく、取るとその弾力で平らになるといわれ、打つ人の肩も凝らないそうです。済州島にはカヤの保護林があります。戦前、済州島の施政にあたっていた上級官吏が任を終えて日本に帰るときに碁盤用にカヤの大木を伐採をして運んでしまったと、今でも恨みを込めて伝えられています。また、この種は仏像彫刻にも使われました。大分県の国東半島にある富貴寺に安置されている仏像はカヤで刻まれており、余った材でお堂を建てたとも伝えられています。以前は、各地にそれほど大きな個体が生育していたのでしょう。また、日本海側の低地には２m程度の低木にしかならないこの変種であるチャボガヤがみられます。

（共生科学技術研究部教授　福嶋　司）